

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01738

研究課題名(和文) 帰納的理論構築による測定スポーツのコーチング学の体系化

研究課題名(英文) Systematize Coaching theory of measurement sports by inductive theory construction

研究代表者

青山 清英 (AOYAMA, Kiyohide)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20297758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、英語圏と東欧圏におけるスポーツ指導者養成機関で求められているスポーツ指導者の資質・能力養成の志向性について調査・検討するとともに、その中核的理論領域である一般コーチング学の内容とその認識論的立場を検討することによって現在のコーチング学の問題点を明らかにし、「測定スポーツのコーチング学」を体系化することであった。その結果、「競技力論」、「トレーニング論」、「試合論」といった基本的な理論分野を中心に自然科学的なスポーツ科学の知識・理論だけでなく、現場から帰納的に取り出された「実践知」を基底に据えた統合的理論構築が必要となることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで我が国のスポーツ指導者養成は、各競技団体がそれぞれの種目の特徴をふまえて検討されてきた。それは個別種目のコーチング学の知見をもとに構築されてきたものである。しかし、スポーツ指導者の養成は、指導者の幅広い能力の涵養の視点から当該の種目のみならず他種目との関連もふまえて整備されなければならない。このためには一般コーチング学を体系化すると共に、種目類型ごとのコーチング学を体系化することが必要となる。本研究の成果は、測定スポーツのコーチング学の体系化に寄与することができたといえる。また、昨今、社会的問題ともなっているスポーツ指導者の暴力問題に対する提言ともなっているといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate and examine the qualifications and abilities of sports instructors required by sports instructor training institutions in English-speaking countries and Eastern Europe, as well as general coaching theory, which is the core theoretical area. By examining the contents of the above and its epistemological position, the problems of the current coaching theory were clarified, and the "coaching theory of measurement sports" was systematized. As a result, not only the knowledge and theory of sports science, which is a natural science, but also the knowledge and theory of sports science, which is a natural science, centered on the basic theoretical areas such as "competitiveness theory", "training theory", and "match theory", were inductively extracted from the field. It was clarified that it is necessary to build an integrated theory based on "practical knowledge".

研究分野：コーチング学

キーワード：コーチング学 スポーツ指導者養成 帰納的理論 測定スポーツ トレーニング学 学問論

## 1. 研究開始当初の背景

2011年に「スポーツ基本法」が制定され、それに基づいて「スポーツ基本計画」が立案された。このような社会状況のなかでスポーツ指導者のハラスメントの問題が発生し、それを契機に文科省のタスクフォース等の議論をふまえ、現在、「スポーツ指導者育成推進事業2013」が進められている。この事業においては、「コーチング・イノベーション推進事業」としてスポーツ指導者育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成が検討され、カリキュラム骨子では、資質能力として「知識・技能」が取り上げられ、「共通内容」(種目横断的な内容)のひとつとして「コーチング理論」があげられている。このことはスポーツ指導者の学びとして、コーチング学の必要性が求められていることを意味している。

スポーツ指導者養成の中核領域であるコーチング学は、トレーニング論を出発点として個別諸科学の知識を基に演繹的理論構築による学際応用理論として発展してきたが、その過程で理論体系を構築する研究領域の取捨選択の問題、自然科学的な方法によって得られた知見の実践への適用性の問題が指摘されるようになってきた(朝岡、2017)。つまり、「一般コーチング学」におけるさまざまな理論は、その知見が認識論的な立場を考慮せず、羅列されているので、それらの知見が実際の現場での指導にどのように役立てられるのかが明確に伝わらず、それらは読み手の能力に依存しているといった課題が前景に現れてきた。

これまでの研究から見えてきたことは、コーチング学の構築にあたっては、これまでに研究テーマとして取り上げられてきた内容が、現場のコーチング活動をふまえて設定されたテーマなのかといった点について再考することを求めるものである。また、理論と実践の架橋性の観点からは、一般コーチング学と個別コーチング論のあいだに、測定・判定・評定といった勝敗の決定方式に基づく分類に基づいた種目類型別のコーチング学について検討することの必要性が生じている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、英語圏と東欧圏におけるスポーツ指導者養成機関で求められているスポーツ指導者の資質・能力養成の志向性について調査・検討するとともに、その中核的理論領域である一般コーチング学の内容とその認識論的立場を検討することによって現在のコーチング学の問題点を明らかにする。そして、その結果をふまえて、競技パフォーマンスが量的に評価される測定スポーツを対象とした「測定スポーツのコーチング学」の構築を目指すことにあった。

## 3. 研究の方法

本研究は以下の手順で進められた。(1) ICCE( International Council for Coaching Excellence; 国際コーチングエクセレンス評議会)等が提示しているスポーツ指導者の資質・能力のあり方について調査する。(2) 英語圏と東欧圏におけるコーチング学の内容とその認識論的立場を調査する。(3) (1)と(2)の内容について比較検討し、現在のコーチング学の問題点を考察する。さらに、(4) (3)の結果をふまえて、測定スポーツを対象に検討し「測定スポーツのコーチング学」の体系に関する試論を提示する。

## 4. 研究成果

### (1) 英語圏におけるスポーツ指導者養成プログラムと一般コーチング学の特徴

ICCE を中心とした英語圏のスポーツ指導者養成のためのテキストや講習内容を調査してみると次のようなことが明らかとなった。まず、スポーツ指導者に必要な「知識」としては、対人関係論的な知識と自然科学を中心としたスポーツ科学に関する知識とまとめることができた。さらにスポーツ指導者養成のための講習内容は、「現場で起こりうるさまざまな課題」に関する思考・判断や態度・行動に関する実践力の養成に軸がおかれながら、スポーツ医・科学からみた知識・技能の習得が目指されていた(青山、2017)。

### (2) 東欧圏におけるスポーツ指導者養成プログラムと一般コーチング学の特徴

東欧圏における一般コーチング学の特徴を検討するために、ロシア語圏を代表する研究者であるプラトノフの著書を分析するとともに、ウクライナ、カザフスタンが共同運用しているスポーツ指導者養成プログラムについて検討した。あわせて東ドイツの研究書についても分析を行った。その結果、以下のことが明らかにされた。

まずロシア語圏における一般コーチング学では、「ピリオダイゼーション理論」が基底となっており、いわゆる東ドイツを中心としたドイツ語圏でみられる「競技力論」、「トレーニング論」、「試合論」に位置付けられる各理論が配置されていた。唯物論的な思考のロシア語圏であるが、その理論の特徴は、必ずしも自然科学的思考を中心に構成されているのではなく、実際の現場で用いられている帰納的な実践知を科学理論と統合していこうという考え方が認められた。このような傾向は東ドイツでも同様であった。スポーツ指導者の養成プログラムには、古代ギリ

シャのオリンピックとオリンピック大会の復活についての最新の知識（3単位） 近代オリンピックの発展、問題、矛盾（3単位） オリンピック大会に向けたナショナルチームと選手のマネジメントの準備と組織における現代的アプローチ（3単位） オリンピックスポーツの選手に関する各一般理論の動向（3単位） 身体の機能システムと準備過程における適応（4単位） 選手の技術的、戦術的、心理的な準備（4単位） 選手の身体的準備における運動能力とその方法（4単位） 選手の長期的で現代的な準備システムと人間の発育発達（3単位） 選手の年間トレーニングにおける最新のピリオダイゼーション（4単位） ウォームアップ、トレーニング課業、マイクロサイクル及びメゾサイクルの構築に関する現在の傾向と問題（4単位） 試合の準備における現代システムの予測と選択、方向付け、制御、モデリング（4単位） 選手の準備のための医学的および生物学的支援の現状（6単位）というような内容が含まれており、これをみてもピリオダイゼーション理論の重要性が指摘できる（青山、2019）。

### （3）一般コーチング学から測定スポーツのコーチング学へ

日本では「日本コーチング学会」を中心にコーチング学を「一般コーチング学」、「種目類型別コーチング学」、「種目別コーチング学」というように階層化して学体系をまとめる作業が進められている。本研究の一般コーチング学及びスポーツ指導者養成プログラムの検討から、新たに体系化が目指される「測定スポーツのコーチング学」では、「競技力論」、「トレーニング論」、「試合論」といった基本的な理論分野を中心に自然科学的なスポーツ科学の知識・理論だけでなく、現場から帰納的に取り出された「実践知」を基底に据えた統合的理論構築が必要なことが明らかにされた。

### <引用文献>

- 朝岡正雄(2017) コーチング学の今日的課題、日本コーチング学会編、『コーチング学への招待』、大修館書店、pp.55-64.
- 青山清英(2017) スポーツ指導者養成機関のスポーツ指導者養成教育における理論知と実践知、教師教育と実践知、pp.55-58.
- 青山清英・青山亜紀(2019) ウクライナにおける上級コーチ養成教育、陸上競技学会誌、17、pp.87-93.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青山清英	4. 巻 1
2. 論文標題 保健体育教員養成課程におけるマイネル運動学の役割（1）運動認識とその方法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体と教育の実践知	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 関啓太郎・松原拓矢・井川純一・長野友紀・青山清英	4. 巻 2
2. 論文標題 女子中学生を対象とする投能力向上のための学習プログラムの効果と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 関啓太郎・松原拓矢・井川純一・伊佐野龍二・青山清英	4. 巻 1
2. 論文標題 投能力向上のための学習プログラムが女子中学生の投能力と動作に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体と教育の実践知	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 青山清英ほか	4. 巻 17
2. 論文標題 ウクライナにおける上級コーチ養成教育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 陸上競技学会誌	6. 最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青山清英	4. 巻 2
2. 論文標題 スポーツ指導者養成機関のスポーツ指導者教育における理論知と実践知	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 51～58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kiyohide AOYAMA・Aki AOYAMA	4. 巻 1
2. 論文標題 General Coaching Theory in Japan, International Scientific Congress	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Olympic Sports and Sport for All " Book of Proceedings	6. 最初と最後の頁 75-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Tomoki, N., Keitaro S., Junichi I., Takuya M., Kiyohide A.
2. 発表標題 Effectiveness of mechanical energy utilization during lifting phase of squat
3. 学会等名 XXV Cigrass of the International Society of Biomechanics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青山清英
2. 発表標題 コミュニケーション能力の向上に対する人間学的運動学習の可能性
3. 学会等名 日本臨床教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青山清英
2. 発表標題 ウクライナ、カザフスタン共和国における上級コーチ養成プログラム
3. 学会等名 日本コーチング学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井川純一、青山清英
2. 発表標題 クロスカントリースキージアゴナル走法の機能構造分析
3. 学会等名 日本コーチング学会第29回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本陸上競技学会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 198
3. 書名 陸上競技のコーチング学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------